

書院造庭園に関する研究  
——その 1：初期書院造庭園と会所・泉殿の庭園——

浅野二郎・仲 隆裕・藤井英二郎  
(環境植栽学研究室)

**Studies on the Shoin-style Garden-Part 1: The Early Stages of Shoin-style Garden, and the Gardens in front of Kaisho and Izumidono.**

Jiro ASANO, Takahiro NAKA, Eijiro FUJII  
(Laboratory of Planting Design)

**ABSTRACT**

The compositions of the early stages of shoin-style gardens are analyzed using historical materials like "Miyoshi-chikuzennokami-Yoshinaga-ason-tei-e-onari-no-ki" in the Eiroku period (1558-1569). The fundamental composition of Miyoshi's garden has a similarity to that of the exterior spaces of Hosokawa Tenkyu's residence which was drawn in the Rakuchu-Rakugai-byobu owned by Uesugi. It is also similar to the exterior spaces of Nishi-honganji's Taimenjo, whose composition of interior spaces is a typical type of the shoin-style. Therefore, we considered the composition of the exterior spaces of Miyoshi's residence is a prototype of that of the gardens in front of Nishi-honganji's Taimenjo. We also considered the gardens in front of Kaisho and Izumidono as those prior to the shoin-style garden. Finally, we suggested that the constructors might have developed their techniques with the constructions of these prototype gardens, and they could have applied their techniques in the constructions of shoin-style gardens.

1. はじめに

わが国の住宅建築の重要な様式のひとつに「書院造」がある。この書院造は太田がいうように、日本の住宅が明治以後、次第に洋風化してきたとはいえ、根本的な変化を生じたのは第二次大戦以後であって、それもまだ本当に一般化したとはいいいにくい。したがって今日の日本住宅のかなりの部分は、いわゆる書院造のうちに含まれるといって過言ではない<sup>1)</sup>、とされる。この書院造の住宅に対応する庭として書院造庭園がある。

本論文では書院造庭園にかかわる多くの問題のうち、主として書院造庭園の成立に関する問題を探りあげ、考察する。

古代において成立した寝殿造が、中世に向けて次第にその内容を変え、書院造へと展開した。庭園の実態もまた、住宅建築のこのような様式的展開に対応して、寝殿造庭園から書院造庭園へと展開したとされる。しかし庭園における様式のこのような展開の過程をつぶさにあとづけるための現存事例は、遺跡を含めても、まことに残念ながら、余り多く残ってはいない。それ故、ここでは

その欠を補うものとして、それぞれの時代に書き残された諸種の記録あるいは描き残された絵画、特に洛中洛外屏風のたぐいを重要な手がかりとして書院造庭園の成立過程、即ち初期書院造庭園について、いささか考察を加えようとするものである。

2. 三好筑前邸の庭園

「書院造」に関する住宅建築の面からの研究については多くの成果が挙げられている。太田静六<sup>2)</sup>はその著書のなかで、多くの史料を踏まえ、住宅建築が寝殿造から書院造へと次第に展開してゆく過程を、書院造形成過程と題する模式図(寝殿造変遷図)として簡潔にまとめている。この図は書院造が寝殿造、特に二棟廊が重きをなす寝殿造、即ち二棟造から次第に移り変わりつつ、形成されてゆく姿を「形」(平面)のうえからとらえたものであり、書院造が形成される過程を考えるうえで、よき示唆を与えてくれるものといえる。

野地は、書院造がこのようにして形成されるに到った背景について論じ、「書院(建)の成立を促した力は、一言でいえば、戦国諸侯の出現と、それにともなう武士の

変質過程とに根ざしていると思う<sup>3)</sup>としている。住宅がもつ本来の機能が、そこに住む人びとの生活の受け皿であってみれば、住宅建築の様式的変遷が、太田の指摘するように、「形」のうえでとらえ得る背景には、当然、野地が指摘するような、人間の側からする変遷の要因、いわゆる経済・社会的な変容の側面も同時にかかわっている点を等閑に付することはできない。もとより、書院造形成の要因には建築にかかわる諸々の技術的な発達に由来する側面の少なくないことは云うまでもなからう。

これら種々の側面からする書院造の成立、あるいはその成立過程について、住宅建築の分野における研究では極めて多くの研究成果が挙げられている。しかるに一方、これに対して、少なくとも書院造が成立する時期、ないし成立過程における庭園、いわゆる初期書院造庭園の研究はまことに少ないといわざるを得ない。

ところで、書院造に関する如上の諸研究を踏まえるとき、庭園もまた、寢殿造庭園から徐々に書院造庭園へと展開してきたものとみてよいであろう。そして、その時期は、初期書院造の成立が、さまざまな異見はあるとしても、おおよそ室町末期とされるように、初期書院造庭園の成立もまた、室町末期とみてよいのではないかと考える。筆者らは、この問題にかかわるものとして、さきに造園雑誌50巻5号に、その研究の一端を報告した<sup>4)</sup>。即ち、それは室町末期、ほぼ大永5年(1525)から天文8年(1539)の当時の京都の様子を描いたとされる町田家旧蔵洛中洛外屏風(以下“旧町田本”と略記する)と、天文17年(1548)から永禄7年(1564)の当時における京都の状況を描いたとされる上杉家蔵洛中洛外屏風(以下“上杉本”と略記する)を中心資料として初期書院造庭園の成立に関して考察を加えたものであった。

それは、概括的にいえば、室町末、大永年間から永禄年間に亘る——短くみておおよそ10年、長くみて約40年——という時間の経過のなかで見られた庭園の状況変化を比較し、検討しようとするものであった。

いま、上述の論文の中で本論文に直接関わる部分を抄出すれば次の如くである。

將軍邸：“旧町田本”についてみると、これは義晴の「柳の御所」である。主庭をなす主殿南庭には大きな池が穿たれてはいるが、主殿前面には“南のひろにわ”を感じさせる平坦部分がつくられている。庭は東の築地まで一杯につくられ、池は土塀のそばにまで延び、護岸石組がなされている。“上杉本”についてみると、これは義晴の室町殿である。南庭には大きな池が穿たれ、池中には岬があり、見事なマツに添えて白梅が植えられている。主殿前面の平坦部分は柳御所に較べてかなり狭い。

池の東北部には晴と藪の空間を隔てるようにして鱧板

塀が建つ。この塀は、大館常興日記にみられるように、將軍の御座敷から見える庭において、鱧板や塀(土塀か)で垣をするのは先例がないにもかかわらず設けたものとされる。而して、このような新しい手法を採り入れる自由な姿勢が、ひいては書院造をうみだし、書院造庭園を成立させる原動力のひとつとなっているものとみた。

細川管領邸：“旧町田本”についてみると、これは高国時代の邸とされる。南庭には池が穿たれ、主殿の南には“ひろにわ”が広くとられている。池には唐破風をつけた亭をもつ見事な亭橋が架け渡されている。このようないわゆる屋形橋は東山殿庭園につくられた竜背橋あるいは義政の烏丸殿にあった湖橋に遡り得るものであって、それは寢殿造庭園にみられた橋とはその系列を異にするものである。

南庭を限る土塀の中ほどには中門が開かれている。それは寢殿南階から中門へ至る動線を、この邸ではまだ残していることを示唆するものとみてよいであろう。“上杉本”の管領邸は晴元時代の邸とされる。その主庭は高国時代のそれを継承したものであるが、細部について見るとかなりの変化が認められる。すなわち、

庭の西南隅には、新たに高い築山が築かれ、その裾には見事な石組がなされている。

ここで特に注目したい点は、高国時代に見られた主殿から“ひろにわ”、さらに中門から表門に通じる一連の空間が、ここでは失われている点であり、それは伝統にこだわらない新しい空間構成といえる。そして、それは庭園について見るとき、寢殿造庭園の地割りから書院造庭園の地割りへの展開に深くかわるものと考えられる。

典厩邸：“旧町田本”を見ると、主庭は主殿の南前面にひろくとられている。主殿正面、南の築地塀に寄った位置には数を抑えながら、しかし選り抜きの石を使った見事な石組、これに配するに松と梅の古木を以てした、まことに趣き深い平庭をつくり出している。主庭の北を限る土塀には中門が開かれる。主庭の東南に寄せて配植された一群の植栽は、この中門が開かれたとき、見付けの植栽として、おそらく見事に機能したであろう。

このように見るとき、この南庭は緊張度の高い庭園を構成しているといえる。また、同時にこの庭園には主殿前面の“ひろにわ”としての空間がなお確保されている姿が認められる。“上杉本”における典厩邸は晴賢の屋敷であり、これと“旧町田本”にみる尹賢時代のそれを比較するとき、主庭の構成は大きく異っていて、大規模な改造が行われたことを示している。即ち、主殿前面の主庭についてみると、かつて、東築地まで延びていた平庭は新たに建てられた塀によって著しく狭められ、さながら内庭の観を呈するに至っている。この塀には、もはや

中門は見られず、内庭はこの塀によって画然と仕切られている。しかも、内庭には数多くの巨石が主殿の間近かまで配置され、また池が穿たれている。内庭の東を限るこの塀と四脚門の南に設けられた築地塀によってつくり出された中門廊前面の空間は、尹賢時代において“ひろにわ”が果たした機能を分け持つ空間とみてよいかも知れない。而して、この典厩邸の内庭に見る状況には、園城寺光浄院客殿における建物と庭園のかかわり合いを想起させるものがあり、この庭園を初期書院造庭園の確かな一例としてよいであろう。

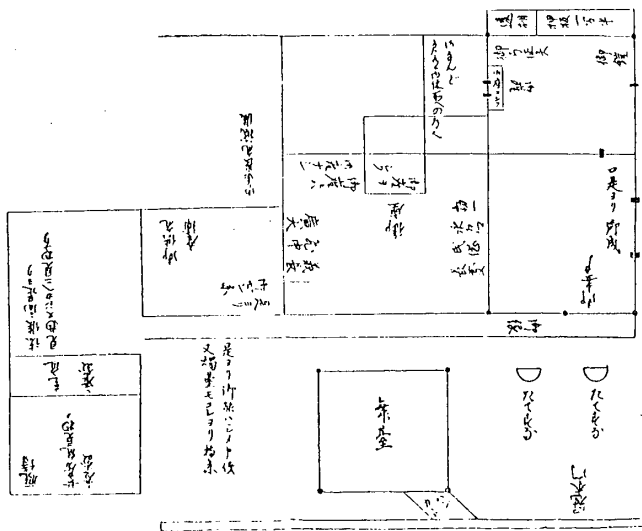
以上に抄出するように、宮廷にかかわる行事がもたれる可能性の高い將軍邸では、細川管領邸、典厩邸に較べてこの時期に於いてもなお寝殿造的な色あいをより多く

残す庭園のあり方がみられたといえる。これに対し、典厩邸では、“上杉本”の時代、即ち晴賢の時代に到って、それまでの庭とは大きな様が変わりをしている状況が見られる。つまり、寝殿造庭園の機能を残していた尹賢時代の庭とはちがって、中門廊から延びる塀が、それまでの主庭部を画然と2つに分け、主殿前面には園城寺光浄院客殿の庭園に通うような庭づくりが行われるに到っている様子が、この洛中洛外屏風から読みとれる。

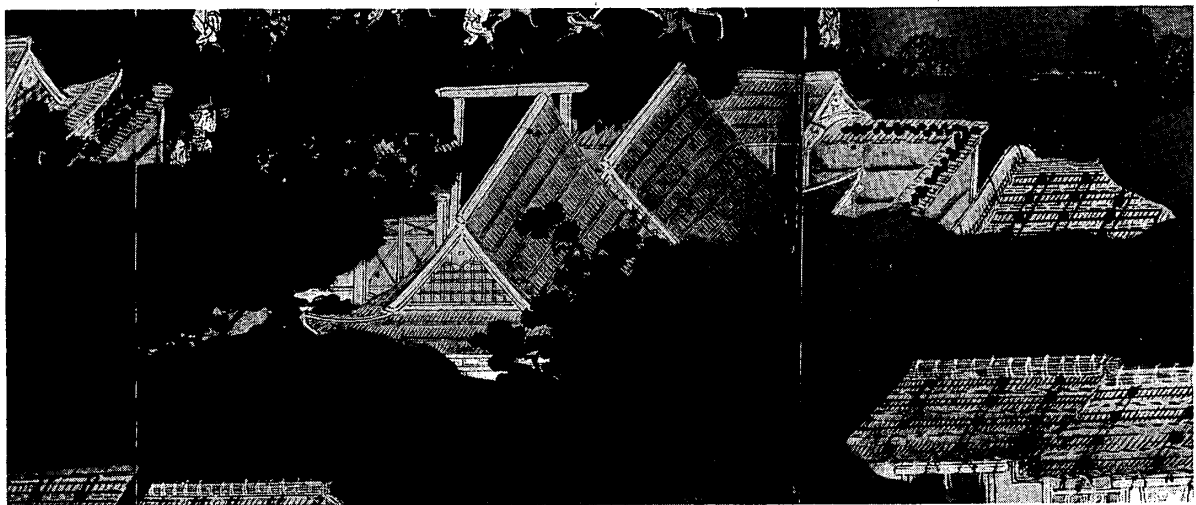
群書類従には永禄4年(1561)に13代將軍足利義輝が三好筑前守義長(のちの義興)邸へ御成の際の記事が見える。このお成に関する群書類従の記事は正・続両編に記載されており、その標題を正編では三好筑前守義長朝臣亭江御成之記<sup>5)</sup>、続編では三好亭御成記<sup>6)</sup>としている。

取りあげている内容は、両編ともその基本において違いはないが、取りあげる項目、表現等についてみると、それぞれに特徴があり、両編には相互に欠を補う点が見られる。それ故、本研究では両編を参照しつつ、お成の場の状況について考察する。これらの記事によれば義輝は西の築地に新たに設けられた冠木門をとおり、立砂の間を経て、主殿に入った。義輝はまず奥の四間に通される。ここは納戸構でその東には1間半(約3m)の押板と違棚がある。この日は納戸構の前に敷づめの畳の上にもう一枚御座畳を置くかたちで、そこを將軍の座としていた。したがって、ここでは主客・將軍義輝は南の庭に正対するかたちで座ったといえる。ただし、この庭がどのようなものであったかを群書類従は伝えていない(第1図参照)。

いま、“上杉本”洛中洛外屏風をみると、典厩邸と道ひとつ距てて東に隣る位置に、屋根を板で葺きそのうえに土(石)を置いた築地塀<sup>7)</sup>をもって囲んだ一画が描かれて



第1図 三好義長邸平面図  
(群書類従第22輯, 巻第409より)



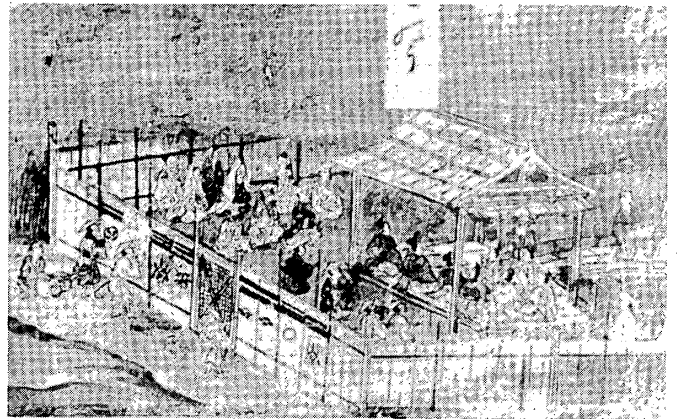
第2図 上杉家蔵 洛中洛外屏風に描かれる三好筑前邸  
(標注 洛中洛外屏風上杉本より)

いる。これに「三好筑前」の書き込みがあるから、ここが三好筑前邸であったことは確かである。ただ、ここが將軍義輝御成の邸であるか否かは、いささか吟味を要するところであろう。既報(造園雑誌50巻5号)において、「上杉本」洛中洛外屏風は天文17年(1548)から永禄7年(1564)のころの京都の様子を描いたものと推定した。もし、この推定を正しいものとするれば、上に述べる將軍の三好邸へのお成は永禄4年であったから、まず年代のうで「上杉本」洛中洛外屏風に描かれているこの邸においてであったとされよう(第2図参照)。

この推定をささげる、もうひとつのあかしは、冠木門である。三好筑前守義長朝臣亭江御成之記には、米村但馬守を奉行として、この日のために新たに冠木門を作ったことが見える。屏風に描かれる西の築地塀に開く大きな冠木門は、おそらくこの將軍御成に当ってあらたに作ったそれであろう。これらはいずれも、「上杉本」洛中洛外屏風に描かれた三好邸をこの御成を迎えた邸とする確かな証拠とはなし得ないが、しかし一面において、かなりの確率で推定することのできる手がかりとすることは許されよう。いま、仮りに、この推定を正しいものとするれば、この屏風が伝える絵は、三好筑前守義長朝臣亭江御成之記の内容を理解するうで大きな手がかりを提供してくれる。即ち、主殿の南には見事な広葉樹の大木や老松が配植されている様子がみられる。この植込みの間からは、主殿から南に向って延びる屏が垣間見られる。この屏には門があり、いわゆる屏中門の形をとっている。つまり、この屏によって主殿の南側にひろがる外部空間は西(表)と東(主または内)庭に分たれていた。

義輝が最初に通された奥の四間において正対したはずの庭は、即ちこの東庭であり、この三好邸における主庭をなすものとみてよいであろう。そしてこの庭には見事な老松が配植されるにふさわしい庭の造形がなされていたとみてよいのではなかろうか。

奥の四間で式三献などの儀式ののち、やがて將軍は西向の九間に移る。座敷の正面はもうひとつの庭、西(表)庭である。ここには橋がかりを伴う能舞台が設けられていた(第1図参照)。この能舞台は、冠木門の北にあることから、三好亭御成記に「舞台東向門北楽屋被圍候」とみえる舞台とみられる。この記事の内容の受け取り方には種々の意見があろう。即ち、ひとつには、この舞台は將軍の御成に向けて特設された舞台であったとする受け取り方である。また、ひとつには特設されたのは楽人の控えの場としての楽屋であって、舞台はすでに存在していた、とする受けとり方もあるであろう。いま、ここでは東を正面とする舞台と楽人の控の場を、橋がかりを含めて、將軍のお成りのために特設したものと受け取って



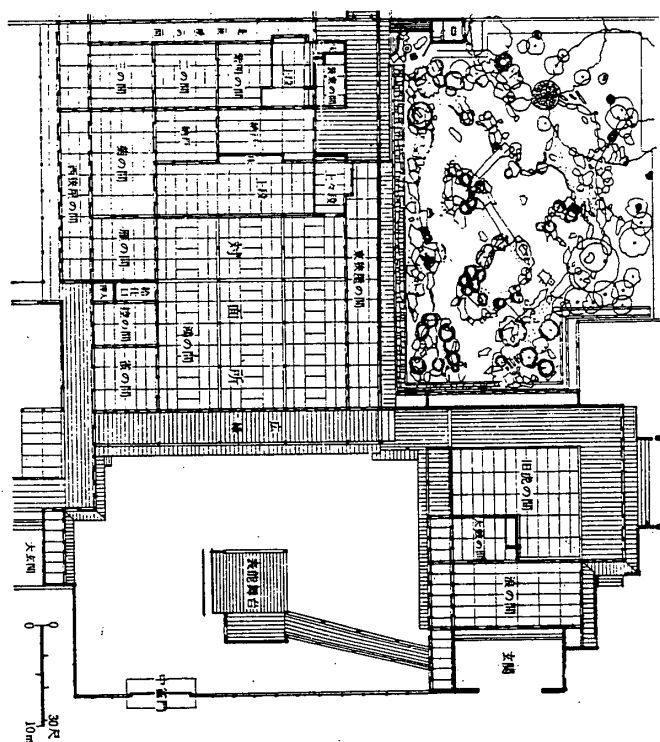
第3図 旧町田家蔵 洛中洛外屏風に描かれる能舞台  
(堀口捨己：書院造りと数寄屋造りの研究より)

おく。

このころ巷間に流行した能舞台の様子が、「旧町田本」洛中洛外屏風に描かれている(第3図参照)。図によれば加茂の川原の一隅に立つこの能舞台は、板をたてまわした極く簡単な囲いの中に建てられた切妻屋根の舞台で、それにはゆるやかな反りをもつ橋がかりを取り付けてはいるが、図にみる限り、それは、今日の能舞台に較べるとき、「至って輕鬆な」と形容される程の施設であったことがうかがえる。

三好亭における西向九間の前庭に設けられた將軍御成りを迎えるためのこの能舞台が、果して第3図にみるようなものであったか否かは、にわかには断じ得ないが、このような能舞台が巷間に流行していた点を考慮に入れれば、西(表)の広庭の能舞台を特設の舞台とする推定も、許されてよいのではなかろうか。もしこの推定が許されるとすれば、それはこの表の広庭が西に隣る典厩邸ですで見たとように、さまざまな利用に対応するための場としてとらえられていた、とみることもできるのであって、それはこの時期における庭空間の構成の原理を考えるうで、重要な示唆を与えてくれる貴重な資料といえる。

いま、再び第1図を見ると、洛中洛外屏風に描かれる三好亭の状況とこの図とを照合してみると、絵に描かれている主殿から南に延びる塀と、冠木門からさらに南に延び、やがて東に矩折れして光照院の北を限る道に沿うようにして延びているはずの築地塀とが、第2図では省略されていることが解る。このようにして第1図を補充してみると、東(主)庭と西(表)庭とは塀によって明らかに区画され、それぞれにひとつの庭空間を構成していることがわかる。而して、これら2つの庭空間を主客の応接の場としてみると、それはそれぞれ別途の用に充てられていると理解される。この三好邸の庭空間の構成をこのようにとらえるとき、それはすでに指摘した



第4図 西本願寺対面所（鴻の間）とその庭園  
（平井聖；城と書院より）

典厩邸の場合に通ずる原理をもつ外部空間の構成とみてよいであろう。その意味で、この三好邸の東（主）庭もまた、初期書院造庭園に属するひとつの事例とみることができるのではなかろうか。東（主）庭には、すでに触れたように老松の配植がみられる。しかし、それ以上さらに詳細な姿をこの庭について知ることは今のところできない。けれども、見事な老松が配植されている姿やすでに述べた各種の状況などから推して、おそらく、それは座観に耐える庭づくりがなされていたとみてよいのではなかろうか。

いま、寛永9年（1632）の建築とされる京都・西本願寺対面所（鴻の間）の建築と庭園の関係をみると第4図の如くである。この図を見ると、南を正面とする鴻の間の東には、枯山水として高名な、あの虎溪之庭が配置されている。一方、鴻の間の正面は一面砂敷きの平庭で、能舞台がそのほぼ中央に建つ。この矩折れに隣り合う東庭と南庭を分かつものは、表玄関の間を含む、遠侍とも目される建物と対面所を結ぶ伝廊である。この西本願寺対面所とその庭園の構成をみると、隣り合う2つの庭を隔てるものが三好邸の場合塀であり、鴻の間の場合伝廊であるという違いはあるにせよ、相互に極めて通い合うものがあるといつてよいであろう。

さらにいえば、それは三好邸にみる庭園の構成原理が、書院造りの極く完成した姿を持つとされるこの鴻の間の

庭園の構成原理に通じるものであるとみられるということであろう。このように考えるとき、三好邸のそれは、西本願寺対面所の外部空間としての庭の構成手法の祖型をなすものとみてよいのではなかろうか。

以上に見るように、将軍・管領などの上級武家住宅の庭園は室町末期・天文、永禄ごろには、それまでの寝殿造庭園からいわゆる初期書院造庭園へと、次第にその内容を変えてゆく姿がうかがわれるようになる。しかし、その変容のあり方は必ずしも一様でなく、その生活のあり様によって、宮廷とのかかわりの深い将軍邸より管領邸、典厩邸、あるいは三好筑前邸などにおいて、従来の形式にとらわれず、より自由にその姿をかえている姿が読みとれる、といえよう。しかも、そのあらたな構成をもつ庭と座敷が、来客を迎えるに当って具体的にどのようなに使われたかを、お成記の記録を参照することによって、たとえわずかとはいえ、屏風に描かれた図と照応しつつ考察することを可能にしてくれる。その意味でこの2つの史料は初期書院造庭園の問題を検討するうえで、極めて重い価値をもつものとしてよいであろう。

### 3. 会所とその庭園

足利義教の室町殿にその例をみるように、室町時代をとおして上級公家・武家などの住宅には、しばしば会所が営まれた。

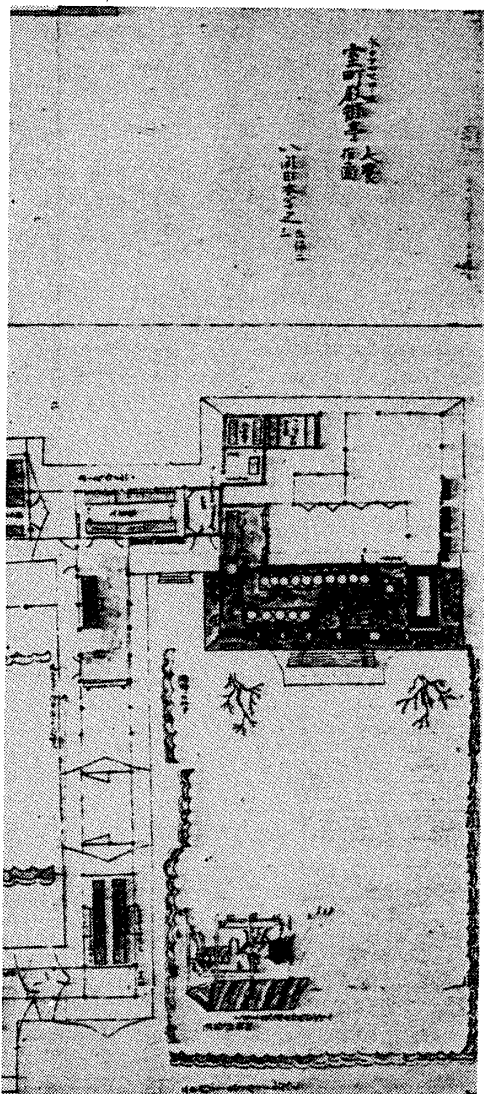
そこでは和歌・連歌・闘茶などのための会合が行われたことは、すでによく知られるところであり、会所はむしろ、そのために造られた施設といつてよいであろう。それ故、ここでは、当時珍重された唐絵や唐物を飾り付けるなど、さまざまに工夫をこらし装飾するのが通例であった。

もつとも、会所はそのはじめ、二棟廊や中門廊などを臨時に鋪設し、それに充てていたもので、時には応永度内裏の場合のように小御所を室礼して会所とする例<sup>9)</sup>もみられた。しかし、やがて専用の座敷あるいは建築が出現する。その早いもののひとつに、例えば義満の室町殿あるいは北山殿会所<sup>9)</sup>があげられる。いま、応永から長享に亘る間の主な史料のなかから著名な邸館につくられた会所の例を挙げて10指を超える数である<sup>10)</sup>。

本論文ではこれら多くの事例の中から、2.3の事例をとりあげ、検討を加えることとする。

#### 義教万里小路殿・室町殿

義教は永享元年（1429）、それまで住んでいた三条坊門殿から万里小路殿に移る。永享3年（1431）2月7日、看聞日記の著者伏見宮貞成親王（のちの後崇光院）は義教の邸を訪れる。看聞日記はこのときの様子を伝えていますが、日記に奥端両所としていたから、ここでは会所が

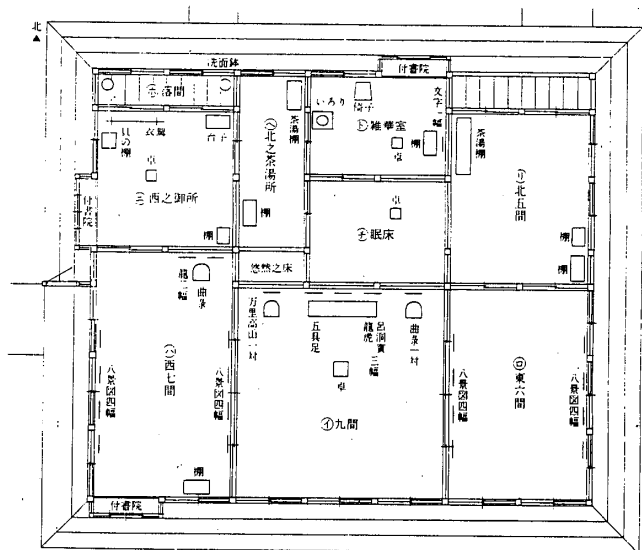


第5図 永享4年室町殿御亭大饗指図(部分)  
(日本の美術第199号より)

2ヶ所建てられていたものとみられる。

貞成親王は椿葉記に「御会所山水など見廻は、軒ば(端)の梅が香は蕙麝をちらすにことならず。池辺の柳のかげは翠黛をひたせるにあひにたり。会所の飾金玉をならべ、宴席のよそほひ錦繡をしけり<sup>11)</sup>。」としていて、この会所の室礼の見事さと、それにふさわしい庭づくりがなされていた状況を書き残している。

義教はこの後まもなく室町殿を造営し、永享3年12月11日にはここに移っている。この室町殿(上御所とも)は足利將軍歴代のうち最も整備されたものとされ、邸の東半<sup>12)</sup>には鴨川の支流から水を引き入れてつくったとされる池庭が営まれた。即ち、一条兼良の和歌#序に「……左相府中名園。水引= 鴨川之支流-。山移= 鼈背之品字-。……積翠未<sup>レ</sup>足<sup>レ</sup>比焉。……」<sup>13)</sup>と見えることによつて知ることができ、またそれが秀れた庭園であったこと



第6図 義教室町殿南向会所復元推定図  
(宮上茂隆; 会所と飾り, 茶道聚錦7, 所収より)

も解る。この池水の周辺には(南向)会所、(北向)会所泉殿、新造会所、観音殿、持仏堂、亭などが建てられていたものとみられる。ここで注目すべき点は寝殿と会所・常御所のあいだ、即ち寝殿(第5図参照)を中心とする公式の場と、より内向きの場との間に垣を設けるのがよい<sup>14)</sup>としていることである。

この庭は醍醐寺<sup>15)</sup>、鹿王寺<sup>16)</sup>、などの作庭を指図した任庵主の指図によるものとされ<sup>17)</sup>、また、実際の作庭工事には庭者虎および菊が当たったものとみられる。

永享9年(1437)10月21日、貞成親王の御子後花園帝は方違のためここに御幸される。この御幸に際して行われた舗設については、これら三つの会所の室礼に当たった能阿弥の記録「室町殿行幸御飭記<sup>18)</sup>」(徳川黎明会蔵)に詳しい。後花園帝を迎えるに当り、本来ならば帝を迎える公式の場・寝殿の利用がその中心であるべきであるが、この御幸では、より内向きの場とみられる会所が重用されたとみてよいようである。そしてそれはこの御幸が方違のためのものであったためとしてよいのではないかと考える。

この御幸に向けて能阿弥が室礼した南向会所の姿については、室町殿行幸御飭記を手がかりとした復元案がすでに提案されている<sup>19)</sup>(第6図参照)。

#### 義政室町殿

義政の室町殿はさきに義教の室町殿が営まれていた上御所の地をトして営まれたものであり、長禄3年(1459)11月16日移徙した邸館である。この室町殿には表向施設として寝殿・公卿座・殿上など、内向施設として観音殿・会所・持仏堂・泉殿西殿などが設けられていた<sup>20)</sup>。

碧山日録<sup>21)</sup>の伝えるところによれば、「……既而自= 南

面- 見= 所<sub>レ</sub> 築山水之境<sub>レ</sub> , 置= 華亭於青松之塢<sub>レ</sub> , 繫  
= 画舫於白沙之洲<sub>レ</sub> , 奇花珍石, 鳧雁鴛鴦, 遊目之資,  
不<sub>レ</sub> 可= 以数<sub>レ</sub> , ……」とし「……土木之工尽= 於此焉,  
……」としている。即ち、数多の殿舎が建ちならび、庭  
には山水の境地が造りだされ、松の緑が覆う小丘の上  
には亭が建ち、白砂のひろがるみぎわには美々しい舟が繫  
留されている。さらに、庭前を飾るに奇花珍石を以てす  
るなど、それは土木の工もここに尽きるかと思われるほ  
どの有様であったとされる。

この会所は蔭涼軒日録等に伝えるところから、公卿・  
武家・僧侶などの対面の場として用いられたことがわか  
り、またそれは月見、連歌など、さまざまな宴の場とな  
った。

泉殿は会所からおくれること約1年、長禄4年(1460)  
12月に完成する。この泉殿は古く藤原道長の東三条殿の  
千貫泉に付して設けられた泉殿にみるようなものではなく、  
後小松院仙洞の会所泉殿あるいは義教の室町殿泉殿  
(北向会所) にみるような内容の施設を伴うものであり、  
いわば会所に準ずるものと見做してよいものであろう。  
この泉殿には讚詩の色紙を貼った障子がたてられ<sup>22)</sup>、「凝  
香」の扁額が掲げられていた<sup>23)</sup>。また、川上によれば付書  
院が設けられていた<sup>24)</sup>という。

応仁元年(1467)、応仁の乱がおこるや、細川勝元のは  
からいによって<sup>25)</sup>、後土御門帝、後花園院はこの室町殿に  
移り、ここが仮皇居に充てられることになる。このとき  
院の居所として、この泉殿が充てられるがこの事実から  
しても、この泉殿が曾ての泉殿とはその内容において、  
かなりの相違があることを知ることができ、上述の理解  
を裏付けるものといえよう。

義政は、やがてこの泉殿のための作庭を計画する。こ  
の泉殿の庭は寛正2年(1461)12月に完成するが、この  
作庭は泉殿の完工に引きつづいてのこととみられる。蔭  
涼軒日録によれば、この作庭には、あの見事な出来栄え  
の南庭の工事にたずさわった、当時泉石(庭づくり)の  
妙手とされた善阿弥が当たった<sup>26)</sup>。旧臘ようやく出来あが  
ったこの泉殿の庭を、義政はその正月、御相伴衆に見せ  
ている。このときの状況を蔭涼軒日録は「御泉殿之御座  
并泉水、以= 春阿- 被<sub>レ</sub> 見= 御相伴衆- 也。諸老不<sub>レ</sub> 勝=  
手足蹈舞- 也。」<sup>27)</sup>と誌している。即ち、春阿弥の案内で泉  
殿を拝見した御相伴衆たちが、御座敷とそれに対応する  
庭園の見事な出来栄えに驚嘆している様子がこの記事か  
らよく読み取れる。けれども、この記録はこの庭園の具  
体的な姿を伝えてくれているわけではない。それは、すでに触れ  
た他の会所の庭についても同様であり、いま管見に触れ  
る限りにおいては、まことに残念ながら、これらの庭の  
具体的な状況を描きだすに充分なだけの資料は見出せて

いない。

ただ、指摘できる点は、ここで取りあげたこれら会所  
あるいは泉殿の庭園が、寝殿前面の広庭とこれに続く泉  
水、即ち南庭とはその果す役割が異なるものとみられる点  
である。即ち、会所・泉殿ではその座敷の用法が第6図  
にみるように室内利用のみで完結し、利用のための一義  
的な動線が庭空間にまでは展開しないことを推測させ  
る。これに対して、寝殿の用法では第5図にみるように、  
公式行事においては、あきらかに、南庭を主要な動線  
の中にとらえるかたちで寝殿の利用が展開する。それは、  
いわばこの寝殿南庭が“用”の空間としてとらえられて  
いることを意味するとみてよいであろう。会所・泉殿の  
庭をこのような視点からとらえるとき、それは、用の空  
間ではなく、観る空間とってよいかも知れない。つま  
り、この庭園は鑑賞を主とする庭園、さらにいえば、座  
観の庭につらなる庭園とってよいものと考えられる。

会所・泉殿の庭をもしこのようにみることが許され  
るとすれば、少なくとも義教の万里小路殿、室町殿ある  
いは義政の室町殿の時代、一面において寝殿造庭園がつく  
られながら、同時に一方において、このような鑑賞を主  
とする庭園づくりが進められていた、といえる。

而して、このような庭づくりには、すでにみたように、  
虎、菊あるいは善阿弥と呼ばれる庭者たちがたずさわ  
っていたのであった。

もつとも、森 蘊博士は虎と善阿弥は深いかわり  
を持つ二つの名だとしていて、にわかにはこれらを3人と  
とらえるのは早計かも知れない。このことは、なお後考に  
俟つところである。

いずれにしろ、庭者虎と呼ばれる人たちが、この時期  
寝殿南庭の工事の実務にたずさわる一方、たとえば任庵  
主のような人たちの指揮のもとに観る庭としての会所・  
泉殿の庭づくりの実務にもたずさわっていたことは紛れ  
もない事実といえる。

やがて、この庭者たちは、観る庭の庭づくりにおける  
この貴重な体験を糧とし、その後展開する書院造庭園  
の作事において中心的な担い手として育ってゆくことと  
なり、彼らの活躍する時期を迎える。いま、2・3の記録  
から拾い出し、その例証のたすけにすれば次のとおりで  
ある。

- 善阿弥、義政の命により蔭涼軒の植栽を行う。(蔭涼  
軒日録 長禄2年2月28日の条)
- 善阿弥の協力の者(助手)1名、大乘院庭園の工事を  
開始。(尋尊大僧正記 寛正6年8月3日の条)
- 益之集箴、善阿弥作の睡隠軒の築山を、遠近峯巒最  
も奇絶なりと賞す。(蔭涼軒日録 文正元年3月16  
日の条)

- 善阿弥の子小四郎, (作庭のため)大乗院に向うべきことを申請。(大乗院寺社雑事記 文明10年10月11日の条)
- 善阿弥の孫又四郎, 細川殿の庭をつくり, 山水之事を説く。(鹿苑日録 長享元年5月20日の条)
- 伏見城の庭者と四郎兄弟3名, 三宝院に(作庭のため)向う。(義演准后日記 慶長3年6月3日の条)
- 三宝院庭園の石橋工事のため庭師賢庭を招く。(義演准后日記 慶長7年2月11日の条)
- 金地院庭園, 遠州の指揮下で賢庭施工。崇伝満足し, 礼物を遣わしたい旨相談す。(本光国師日記 寛永9年5月12日の条)

以上の資料にもみられるように, いわゆる観るための庭の作庭技術は庭者たちによって累代引き継がれ, 磨かれてきた。その技は, やがて書院造庭園の系譜に属する多くの庭づくりの場において, ささまざまな局面に見事に活用されることになるかと解してよいのではあるまいか。足利將軍家に仕えた同朋たちが, 多くの唐絵, 唐物を使いながら会所の飾り付けを担当した。この飾り付けの手法はやがて, 書院造住宅における座敷飾りとして普及し, 発展してゆく。庭者たちの長い世代にわたるこのような努力は, この同朋たちにみるように, 書院造庭園の具体的な造成の上で大きな役割を果たした。また, それはその後の書院造庭園の充実, 発展を支えるものとして忘れてはならない重大な役割を果たした技術とってよいであろう。

### 摘要

本論文では初期書院造が成立したとされる室町・永禄年間における三好筑前邸の庭について, 三好筑前守義長朝臣亭江御成之記を中心にその成り立ちについて考察した。その結果, その構成の基本については特に上杉家蔵洛中洛外屏風に描かれる細川典厩邸がもつ外部空間の構成に通じるものが多いことが指摘された。また, この三好邸の庭としての外部空間の在り方は, 書院造の典型的ひとつとされる西本願寺対面所みる外部空間の在り方と極めてよく通じるものがあることが指摘できる。このことから, 三好亭のそれが西本願寺対面所の庭がもつ構成原理の祖型をなすものと推定した。

また, これらの, いわば観る庭の庭づくりに先行するものとして, 会所・泉殿の庭をとりあげた。ここでは, この庭づくりに深く関与したとされる庭者についても触れた。足利將軍に仕えた同朋たちが多くの唐絵・唐物を使って会所の飾り付けを担当し, やがてその飾り付けの手法が後世, 書院造の住宅における座敷飾りに大きな役割を果たしていったように, これら庭者たちも, やがて成

立する書院造庭園において, そのもてる技能を展開するとした。即ち, 会所・泉殿の庭づくりの場で, 彼らが育て, そしてそれを受け継ぎ, さらに磨き抜いてきた造庭の手法を書院造庭園の場においてもさまざまに活かし, 鑑賞に耐える庭としてこれをつくりあげてきたものと推定した。

### 引用ならびに参考文献

- 1) 太田博太郎(1984): 書院造, 日本建築史論集II 日本住宅史の研究 所収, 東京, 岩波書店, 84-87
- 2) 太田静六(1987): 寝殿造の研究, 東京, 吉川弘文館, 767-768
- 3) 野地修左(1955): 日本中世住宅史研究, 東京, 日本学術振興会, 168
- 4) 浅野二郎・仲 隆裕・藤井英二郎(1987): 書院庭園に関する一考察, 造園雑誌 50 卷 5 号, 7-12
- 5) 三好筑前守義長朝臣亭江御成之記, 群書類従 第22 輯 武家部, (巻第409)所収, 東京, 続群書類従完成会(昭和34年版), 359-378
- 6) 三好亭御成記. 永禄4年., 続群書類従 第23 輯 武家部下 (巻第662)所収, 東京, 続群書類従完成会(昭和34年版), 234-249
- 7) 堀口捨己(1978): 書院造りと数寄屋造りの研究, 東京, 鹿島出版会, 500
- 8) 川上 貢(1968): 日本中世住宅の研究, 東京, 墨水書房, 174
- 9) 同上, 217-218
- 10) 川上 貢編(1982): 室町建築(日本の美術199号), 東京, 至文堂, 70-71
- 11) 椿葉記, 群書類従 第2 輯 帝王部(巻第30)所収, 東京, 経済雑誌社(明治31年版), 145
- 12) 宮上茂隆(1984): 会所から茶湯座敷へ, 茶道聚錦 卷7 所収, 東京, 小学館, 52
- 13) 室町殿行幸記, 群書類従 第2 輯 所収, 前出, 566
- 14) 満濟准后日記 永享3年8月22日条, 続群書類従・補遺一 満濟准后日記(下)所収, 東京, 続群書類従完成会, (昭和62年版), 284
- 15) 同上, 永享2年3月4日条, 133
- 16) 蔭涼軒日録 長享元年8月13日条, 蔭涼軒日録 卷2, 京都, 史籍刊行会
- 17) 外山英策(1973): 室町時代庭園史(復刻版), 京都, 思文閣, 552
- 18) 宮上茂隆(1984): 会所と飾り, 茶道聚錦 卷7 所収, 78-79
- 19) 同上
- 20) 川上 貢: 日本中世住宅の研究, 前出, 246-247



- 
- 21) 碧山日録 応仁2年11月6日の条, 改定史籍集覽  
25冊所収, 東京, 近藤出版部, (昭和11年版), 340
- 22) 蔭涼軒日録 長禄4年12月11日の条, 前出, 卷1,  
281
- 23) 同上, 寛正2年2月26日の条, 前出, 卷1所収,  
292
- 24) 川上 貢: 日本中世住宅の研究, 前出, 249
- 25) 外山英策: 前出, 575
- 26) 蔭涼軒日録 寛正2年12月8日の条, 前出, 卷1,  
324
- 27) 同上 寛正3年正月25日の条, 前出, 卷1, 331